

日本人学生と中国人留学生における友人同士の贈答行動と文化的自己観の関連

富田裕香

1. 問題の所在

日本学生支援機構（JASSO）によると、平成24（2012）年5月1日時点での留学生総数は137,756人で、そのうち在学段階別留学生数で最も多いのは大学（学部）・短大・高専の71,361人である。また、出身国（地域）別留学生数で最も多いのは全体の62.7%を占める中国の86,324人であることから、今後も大学での日本人学生と中国人留学生の交流機会の増加が推測される。このようにグローバル化が急速に進行する一方で、学生同士の交流を阻む要因も散見される。

日本人学生と留学生の交流を阻む一般的な要因としては、留学生についての基本的な情報提供が少ない、交流する機会や場所、時間がないという「物理的壁」や、どのような言語やトピックで話したらよいかよくわからないという「スキルの壁」がある。また、知らない相手に対する不安や遠慮があったり、自己防衛的な関わり方をしたりするなどの「心理的な壁」、コミュニケーション上の戸惑いや宗教的な価値観、習慣の差を含む「文化的な壁」なども考えられ、これらのことから、日本人学生と留学生は互いに関心はあるものの関わりが深まらないという現状がある（加賀美、2001）。また、戦（2007）は、大学における友人との付き合い方について、日本人学生と中国人留学生はどちらも、相手が自国の友人か相手国の友人かにより変化する態度と変化しない態度があり、後者は自文化の影響を受けた態度であると述べている。さらに、中国人留学生は異文化環境にいるため対人関係を形成する過程に自国と異なるスタイルを実感することが多く、文化の違いによる付き合い方の差異をより強く意識するのに対し、日本人学生は異文化の友人とも親密な友人関係を結べ、付き合い方も自国の友人とほとんど変わらないという意識のもとで実際に交流を始めると、予想外の文化の壁に困惑する可能性がある指摘している。このように、日本人学生は両者の行動の差異を前提としていないことから相手の行動に不信感を抱くことも懸念され、このことは両者の行動様式の背景に価値観が影響していることが考えられる。

2. 先行研究と研究目的

人に何かしてもらったときにはその相手にお返しをし、自分が何かしてあげたときには相手からお返しをしてもらいたいと思うなど、私たちの人間関係には、返礼の義務と期待という互酬性の概念が関わる。互酬性とは自己と他者のあいだに形成される相互関係のことで、この概念が介在する行動に贈答という交換形態がある。交換とは個人または集団間でやりとりされる財から成る社会的相互行為で、そのひとつに

社会交換がある。交換にはほかにも、当事者のあいだで「商品」を売る、買う、支払うという商品交換や、当事者のあいだで「贈りもの」を与える、受ける、返すという贈与交換がある。贈与交換は当事者相互の好意と信頼が条件になっていることが社会交換と似ているが、モノとモノのやりとりである。これに対し、社会交換はモノのほかに情報やサービス、感謝、敬意なども交換財と認めているのが特徴である。互酬性は普遍的に見られる概念であるが、どのような形で反映されるかは文化によって異なっている(伊藤, 2011)。このことから、相手との好意的な感情や意思の共有を目的とするお土産や誕生日プレゼントを渡す行為、貸し借り、食事を奢る行為や自分の家でのもてなしなどのやりとりは広く贈答行動と言え、このようなやりとりは学生同士でも日常的に行われているものであり、かつ円滑な人間関係構築の価値観に関わると推測される。一般的に、日本人も中国人も人間関係をスムーズにするためによく贈り物をするが、日本人は相手に過度な負担をかけないように気を遣い、中国人は相手に対する尊敬、感謝などの気持ちや相手との関係の深さを考える(尚・徐, 2008)というように、贈答行動に対する両者の価値観には違いが見られる。このことから、どのような価値観が日本人学生と中国人留学生の贈答行動に影響を与えているのかを検証する必要がある。

王(2006)は、日中の大学生に焦点を当て、7項目の贈答行動について比較している。その結果、贈答の理由は日中ともにお祝いや感謝の意を表したいためが最も多いこと、お詫びの意を示したいのは日本人学生の方が多いこと、自分のものを他人と共有したいのは中国人留学生の方が多いことなどが示されている。しかし、これらは単純集計による分析にとどまっているため、贈答行動の背景にどのような価値観が関わっているのかについては具体的に言及されておらず、この点の検証が必要である。また、このような日中の贈答行動に関する相違は、中国人よりも日本人の方が一方的にもらうことを失礼だと捉える傾向があるという「お返し」(尚・徐, 2008; 村山, 1995)や、中国人と比べて日本人はわざわざ来てもらうなどの配慮が働きあまり客を家へ招かないという「家への招待」(尚・徐, 2008)のほか、「食事の支払い」にも見られる。村山(1995)は、中国人は仲間同士でも誘った方が支払うなど、日本人ほど割り勘にする機会は見られないとし、花澤(2008)は、中国社会では、割り勘は一般的には親しさを持たない他人に値する関係で行われる行為であるように、中国語で「関係」と呼ばれる自分を中心とした人間関係のネットワークによって社会的行動に違いが見られることを示唆している。中国人の人間関係と社会的行動に関して、Hwang(1987)は「情緒的關係 (the expressive tie)」、 「中間的關係 (the mixed tie)」、 「道具的關係 (the instrumental tie)」の三類型があるとし、単なるクラスメートの場合は「中間的關係」であるが、親しい友人の場合は家族と同じく永久的で安定した「情緒的關係」にあたるとしている。一方、日本人の大学生の友人関係について岡田(1999)は、理想としては親密で内面を開示するような関係を求めているが、相手はそのような関わりを求めていないと認知し、友人関係維持のために過剰適応的に相手に合わせようとしている可能性を示している。このように、日中の友人との関係構築に対する捉え方が異なり、そのことが相手に自己の好意的感情を示す贈答行動の違いとして反映されることが推測されるが、この点に関する検証も十分になされていない。

さらに、こうした行動の背景に日本人や中国人が持つとされる価値観について述べると、ある集団を対比的に見るときによく示される「集団主義」と「個人主義」がある。一般的に、西欧は個人主義的であるのに対し、アジアは集団主義的だと言われている。トリアンディス(2002)によると、個人主義は「緩やかに結びついた人々が織りなす社会的なパターン」と定義される。それに対し、集団主義は「親密に結びついた人々が織りなす社会的なパターン」と定義づけられ、日本人も中国人も集団主義であるとされる。しかし、園田(2001)が日本人は中国人を欧米的などと形容することがあると指摘しているよ

うに、両者をどちらも集団主義的とすることは包括的であり相互理解の上では十分ではない。このため、「集団主義—個人主義」という比較の観点より、対象を明確化した個人間の価値観の比較の方が重要である。そこで、本研究では、Markus & Kitayama (1991) が提唱する「文化的自己観」という価値観から成る概念枠組を用いた。これは相互独立的自己観 (independent construal of self) と相互協調的自己観 (interdependent construal of self) という自己についてのモデルであり、前者は自己を他から切り離されたものであるという信念に基づき、後者は自己を他と根源的に結び付いているという前提に立つとしている (北山, 1994)。このことから、文化的自己観とは他者との関係から見た自己の捉え方と言えるだろう。また、文化的自己観は現実を構成する機能を持ち、子育てをはじめとする様々な日常的習慣に反映されるものである (北山, 1998)。北山 (1994) は文化的自己観を「ある文化において歴史的に共有されている自己についての前提」と定義しているが、ここでの「歴史的に共有されている自己」とは「文化が継承されてきた中で共有されている自己」という意味合いで用いられているものである。

このMarkus & Kitayama (1991) の概念をもとに、高田・大本・清家 (1996) は「相互独立的—相互協調的自己観尺度 (改訂版)」の作成を試みた。この尺度⁽¹⁾を用いては、日中比較において、相互独立性は中国人の方が高いが、相互協調性は大きな差はないこと (高田, 1997) などが認められている。このことから、高田他 (1996) の尺度は自己と他者という視点から、日本人学生と中国人留学生の価値観の比較が可能であると考えられる。

上述したように、違和感を伴う行動の背景には文化的自己観の影響があることが考えられるため、贈答行動との関連においては、相互独立性の高い中国人留学生は相手の反応よりも自分の意思を尊重し、相互独立性の低い日本人学生の方は自分の意思よりも相手の反応を重視することが考えられる。しかし、これまで文化と相互独立性・相互協調性の関連や、相互独立性・相互協調性と諸社会的行動の関係を検討した例は少ない (高田, 2002) ため、本研究では、日本人学生と中国人留学生を対象に、親しい友人同士の贈答行動及び文化的自己観はどのようなものかを明らかにするとともに、その関連を実証的に検討する。

3. 研究方法と手続き

3.1 研究課題

本研究の課題は、以下のように設定した。

研究課題 1-1 日本人学生と中国人留学生の友人同士の贈答行動はどのようなものか

1-2 出身国による両者の違いはあるか

研究課題 2-1 日本人学生と中国人留学生の文化的自己観はどのようなものか

2-2 出身国による両者の違いはあるか

研究課題 3 日本人学生と中国人留学生は、それぞれ友人同士の贈答行動と文化的自己観にどのような関連があるか

3.2 質問票作成

質問票の質問項目を作成するにあたり、2009年3月から6月にかけて、日本人学生7名 (学部生女性10代2名、大学院生女性20代5名) と中国人留学生10名 (大学院生女性20代10名、滞在年数平均2年4か月) に対して半構造化インタビューを実施した。質問は個人に対し「相手の国の友人の行動に違和感を持ったことがありますか」と自由に回答を求め、たとえば「食事の際に、相手から奢ると言われたらどのような

に感じますか。また、どのような行動をとりますか」など、先行研究で挙げられている贈答や訪問についての場면을例に挙げ、尋ねた。これらをKJ法で分析した結果、「食事の支払い」、「お返し」、「貸借」、「贈答」、「頼みごと」、「家でのもてなし」という6つのカテゴリーに分類された。さらに、他者との関係から見た自己の捉え方である文化的自己観の解釈の参考として、友人関係維持のために重視していることを尋ねた。この結果、日本人学生からは「相手との距離を保つ」、「場面ごとに気を遣う」、「迷惑をかけない」など、相手に不快に思わせないように自分の行動を抑制していることが窺えた。一方、中国人留学生からは、「お互いを理解する」、「助け合う」、「正直でいる」、「遠慮しない」など、自分と相手を同等に重視し、自分の意思を率直に相手に伝えようとしていることが窺えた。

これらのインタビュー結果から、質問票の質問項目を作成した。贈答行動については48項目で、質問内容は食事の支払いなどの場면을提示し、出身国での同性の友人（本音を言える相手）との1対1の場면을想定して聞いた。友人の定義を「本音を言える相手」とした理由は、友人の解釈が個人によって異なるためである。「ぴったりあてはまる(7)」、「あてはまる(6)」、「ややあてはまる(5)」、「どちらともいえない(4)」、「あまりあてはまらない(3)」、「あてはまらない(2)」、「全くあてはまらない(1)」の7段階評定で回答を求めた。同様に、文化的自己観については20項目⁽²⁾で構成され、7段階評定で行った。自由記述欄では、友人の行動に違和感を持った場面と、理想的な友人との付き合い方について回答を求めた。質問票はまず日本語で作成し、日本人学生及び中国人留学生数名に回答してもらい再調整した後、中国語へ翻訳した。翻訳にあたっては日本語教育を専攻とする中国人大学院留学生2名によるバックトランスレーションを行い、これをもとに前述の2名の中国人大学院留学生と日本人大学院生と筆者の4名で等価性を考慮した上で最終版を完成させた。

3.3 調査期間と調査対象者

本調査は2009年7月末から10月にかけて、質問票を配布、回収した。本研究の調査対象者は、日本人学生（学部生148名）と大陸からの中国人留学生⁽³⁾（学部生33名、日本語学校生64名）である。日本人学生に対する配布数は196部、回収数は151部であり、148部が有効回答数である（有効回収率76%）。また、中国人留学生に対する配布数は159部、回収数は113部であり、97部が有効回答数である（有効回収率61%）。調査対象者の属性は以下の通りである（表1）。

表1 対象者の内訳

出身国	日本：148名 中国：97名
性別	男性：115名(日本:60名,中国:55名) 女性：130名(日本:88名,中国:42名)
年齢	日本人男性：60名(平均20.1歳) 10代後半(18.19歳)22名 20代前半(20歳~24歳)38名
	日本人女性：88名(平均20.1歳) 10代後半(18.19歳)28名 20代前半(20歳~24歳)60名
	中国人男性：55名(平均21.5歳) 10代後半(18.19歳)6名 20代前半(20歳~24歳)45名 20代後半(25歳~29歳)4名
	中国人女性：42名(平均22.5歳) 10代後半(18.19歳)1名 20代前半(20歳~24歳)30名 20代後半(25歳~29歳)11名
滞在期間	中国人男性：44名
	~半年:24名 ~1年:7名 ~1年半:8名 ~2年:2名 ~3年:2名 ~4年:1名
	中国人女性：35名
	~半年:13名 ~1年:7名 ~1年半:1名 ~2年:1名 ~2年半:3名 ~3年:2名 ~3年半:2名 ~4年半:2名 ~5年:2名 ~5年半:2名

4. 研究の結果

4.1 友人同士における贈答行動の因子分析結果

研究課題1では、日本人学生と中国人留学生の友人同士の贈答行動を把握するために因子分析を行った。分析方法は主因子法を用い、バリマックス回転を行った。妥当な因子を決定するために、得られた.35以上の負荷量から因子の解釈を行い、負荷量の低いものや複数の因子にまたがって負荷が高い場合、1項目しか残らなかった場合など解釈不能なものを除外した結果、28項目による8つの因子が抽出された(表2)。

第1因子は「高価な物品を、抵抗なく借りる」など4項目から成る。客観的に見て高価な物品や、自分や相手が大切にしている点で主観的に価値のある物品を抵抗なく貸し借りすることから『抵抗のない貸借』と命名した。第2因子は「旅行のお土産は、相手の好みに合わせたものを買う」など6項目から成る。相手の好みや反応に合わせたものを選ぶことから『相手の好みや反応重視の贈答』と命名した。第3因子は「自分が頼みたいことがあれば、どんなことでも気軽にお願する」など5項目から成る。相手との親密なやり取りという点が共通するため『双方向性重視の返報』と命名した。第4因子は「相手の誕生日には、無難なものを買う」など3項目から成る。無難なものや相手が気を遣わないと判断したものを選ぶことから『無難な贈答』と命名した。第5因子は「相手にお礼をしたときはおごる」など3項目から成る。相手にお金を出す場面で、自分が相手に何かしてあげたいという自発的な感情により決定されることから『好意的感情からの奢り』と命名した。第6因子は「食事に誘った方がおごる」など3項目から成る。特別な状況や立場にある方がお金を出すべきという行動規範により決定されることから『規範意識からの奢り』と命名した。第7因子は「食事の支払いは、どんなときでも割り勘にする」などの2項目から成る。どちらか一方の奢りではないため『割り勘』と命名した。第8因子は「相手が自分の部屋にいるときは、相手が気を遣わない雰囲気を作る」など2項目から成る。自分か相手のどちらかの部屋という個人的な空間の中での接し方であることから、『個人的空間での相手への気遣い』と命名した。

さらに、信頼性を検討するため因子ごとにクロンバック α 係数を求めたところ、第1因子『抵抗のない貸借』は $\alpha = .843$ 、第2因子『相手の好みや反応重視の贈答』は $\alpha = .780$ 、第3因子『双方向性重視の返報』は $\alpha = .724$ 、第4因子『無難な贈答』は $\alpha = .663$ 、第5因子『好意的感情からの奢り』は $\alpha = .650$ 、第6因子『規範意識からの奢り』は $\alpha = .649$ 、第7因子『割り勘』は $\alpha = .711$ 、第8因子『個人的空間での相手への気遣い』は $\alpha = .570$ となった。

4.2 友人同士における贈答行動の出身国による両者の違い

次に、出身国による両者の違いを明らかにするため、 t 検定を行い、表2で抽出された8つの因子得点の平均値を比較した。日本人学生の方が有意に高い結果になったのは、第4因子『無難な贈答』($t(233) = 3.91, p < .001$)と第7因子『割り勘』($t(233) = 4.50, p < .001$)であった。また、中国人留学生の方が有意に高い結果になったのは、第1因子『抵抗のない貸借』($t(233) = 4.51, p < .001$)と第2因子『相手の好みや反応重視の贈答』($t(233) = 2.51, p < .05$)、第6因子『規範意識からの奢り』($t(233) = 12.17, p < .001$)であった。一方、第3因子『双方向性重視の返報』、第5因子『好意的感情からの奢り』、第8因子『個人的空間での相手への気遣い』には有意差は見られなかった。

表2 友人同士における贈答行動一因子分析の結果

	Fac1	Fac2	Fac3	Fac4	Fac5	Fac6	Fac7	Fac8
第1因子 抵抗のない貸借								
高価な物品を、抵抗なく借りる	0.775	-0.057	0.103	-0.102	-0.149	0.100	-0.048	-0.084
高価な物品を、抵抗なく貸す	0.770	0.074	0.045	-0.066	0.143	0.059	-0.110	0.045
自分がとても大切にしている物品を、抵抗なく貸す	0.759	-0.087	0.039	0.085	0.107	0.064	-0.029	0.008
相手がとても大切にしている物品を抵抗なく借りる	0.744	-0.142	0.157	0.082	-0.168	0.112	0.135	-0.082
第2因子 相手の好みや反応重視の贈答								
旅行のお土産は、相手の好みに合わせたものを買う	0.020	0.717	0.090	-0.096	0.104	0.037	0.044	0.070
相手の誕生日には、喜ぶか迷惑かなど相手の反応を考えて買う	-0.159	0.693	0.043	0.186	0.187	-0.163	-0.194	-0.018
相手の誕生日には、相手の好みに合わせたものを買う	-0.106	0.659	-0.040	0.051	0.213	-0.096	-0.173	0.066
旅行のお土産には、喜ぶか迷惑かなど相手の反応を考えて買う	-0.016	0.659	0.029	0.056	0.063	-0.034	0.103	0.037
相手に食事や飲み物を出すときは、相手の好みを聞いてから出す	0.047	0.474	-0.068	-0.073	0.038	0.216	0.073	0.118
旅行のお土産は、その土地の名産を買う	-0.089	0.368	0.131	0.157	0.251	-0.067	-0.157	0.040
第3因子 双方向性重視の返報								
自分が頼みたいことがあれば、どんなことでも気軽にお願いする	0.010	0.037	0.704	0.119	-0.155	0.164	0.115	0.008
旅行のお土産をもらったら、すぐにお返しをする	0.023	0.086	0.673	0.093	-0.121	0.178	0.000	-0.016
旅行のお土産は、できるだけ高いものを買う	0.010	0.037	0.704	0.119	-0.155	0.164	0.115	0.008
相手の誕生日には、できるだけ高いものを買う	0.185	-0.235	0.578	-0.023	-0.125	0.186	-0.020	0.124
頼みごとをしたら、すぐにお返しをする	0.083	0.004	0.535	0.114	0.073	0.002	-0.020	0.011
第4因子 無難な贈答								
相手の誕生日には、無難なものを買う	0.066	-0.058	0.140	0.768	-0.090	0.040	0.159	0.010
旅行のお土産は、無難なものを買う	-0.031	0.071	0.082	0.698	0.136	0.008	0.088	0.057
相手の誕生日には、相手が気を遣わないと判断したものを買う	-0.035	0.139	0.189	0.361	-0.084	-0.112	0.159	0.124
第5因子 好意的感情からの奢り								
相手にお礼をしたいときはおごる	-0.078	0.186	0.068	-0.109	0.759	0.063	-0.028	0.012
相手にお祝いごとがあるときはおごる	-0.043	0.127	-0.067	0.039	0.591	0.039	-0.075	0.022
お昼代などの比較的小さなお金は、抵抗なく貸す	0.166	0.200	-0.147	0.040	0.451	0.034	-0.009	0.062
第6因子 規範意識からの奢り								
食事に誘った方がおごる	0.123	-0.034	0.197	0.011	0.041	0.749	-0.138	-0.039
自分の誕生日には、自分がお金を出して友だちをおごる	0.268	0.152	0.155	-0.182	0.048	0.580	-0.124	0.107
お金に余裕がある方がおごる	0.012	-0.127	0.201	0.089	0.055	0.407	-0.126	0.001
第7因子 割り勘								
食事の支払いは、どんなときでも割り勘にする	-0.083	-0.031	0.098	0.179	-0.071	-0.113	0.689	-0.012
食事の支払いは、どんなときでも自分の食べた分のみを支払う	0.001	-0.059	0.070	0.201	-0.070	-0.282	0.635	-0.038
第8因子 個人的空間での相手への気遣い								
相手が自分の部屋にいるときは、相手が気を遣わない雰囲気を作る	0.001	0.190	0.023	0.006	0.050	0.228	-0.063	0.835
自分が相手の部屋にいるときは、相手に気を遣わせないようにする	-0.101	0.064	0.185	0.181	0.058	-0.211	0.014	0.504
累積寄与率(%)	9.156	18.279	25.731	31.145	36.508	41.819	46.038	49.837
α 係数	0.843	0.780	0.724	0.663	0.650	0.649	0.711	0.570

4.3 文化的自己観の因子分析結果

研究課題2では、日本人学生と中国人留学生の文化的自己観を把握するために因子分析を行った。分析方法は高田他（1996）に沿って主因子法を用い、バリマックス回転を行った。妥当な因子を決定するために、得られた.35以上の負荷量から因子の解釈を行い、負荷量の低いものや複数の因子にまたがって負荷が高い場合、1項目しか残らなかった場合など解釈不能なものを除外した結果、13項目による4つの因子が抽出された（表3）。

表3 文化的自己観—因子分析の結果

	Fac1	Fac2	Fac3	Fac4
第1因子 他者評価の意識				
人が自分をどう思っているかを気にする	0.81	-0.12	-0.07	0.26
相手は自分のことをどう評価しているかと、他人の視線が気になる	0.75	-0.07	-0.14	0.29
第2因子 自己判断の確信				
自分でいいと思うのならば、他の人が自分の考えを何とおもうと気にしない	-0.054	0.701	0.061	-0.013
自分の周りの人が異なった考えを持っていても、自分の信じる場所を守り通す	0.062	0.588	0.267	-0.140
たいていは自分ひとりで物事の決断をする	-0.058	0.410	0.237	0.096
自分の考えや行動が他人と違っていても気にならない	-0.173	0.400	0.211	0.037
第3因子 自己意見の保持				
自分の意見をいつもはっきり言う	-0.077	0.141	0.634	0.022
いつも自信を持って発言し、行動している	-0.113	0.212	0.627	0.095
常に自分自身の意見を持つようにしている	0.020	0.238	0.423	0.086
第4因子 他者への親和・順応				
人から好かれることは自分にとって大切である	0.132	-0.063	0.102	0.590
仲間の中での和を維持することは大切だと思う	0.186	0.020	0.061	0.448
自分の所属集団の仲間と意見が対立することを避ける	-0.002	0.065	-0.008	0.437
自分がどう感じるかは、自分が一緒にいる人や、自分がいる状況によって決まる	0.125	-0.027	0.044	0.405
累積寄与率(%)	21.176	38.465	47.529	55.529
α 係数	0.812	0.637	0.622	0.534

第1因子は、「人が自分をどう思っているかを気にする」など2項目から成り、他者からどう思われているかが気にかかることから『他者評価の意識』と命名した。第2因子は「自分でいいと思うのならば、他の人が自分の考えを何とおもうと気にしない」など4項目から成り、他者の意見や状況に左右されず、自分の判断を貫くことから『自己判断の確信』と命名した。第3因子は「自分の意見をいつもはっきり言う」など3項目から成り、常に自分の意見を意識することから『自己意見の保持』と命名した。第4因子は「人から好かれることは自分にとって大切である」など4項目から成り、状況に応じて他者との対立を避けることを重視することから『他者への親和・順応』と命名した。

さらに、信頼性を検討するため因子ごとにクロンバック α 係数を求めたところ、第1因子『他者評価の

意識』は $\alpha = .812$, 第2因子『自己判断の確信』は $\alpha = .637$, 第3因子『自己意見の保持』は $\alpha = .622$, 第4因子『他者への親和・順応』は $\alpha = .534$ となった。

4.4 文化的自己観の出身国による両者の違い

次に、出身国による両者の違いを明らかにするため t 検定を行い、表3で抽出された4つの因子得点の平均値を比較した。有意差が見られたのは、第2因子の相互独立性『自己判断の確信』($t(228) = 6.36, p < .001$)と第3因子の相互独立性『自己意見の保持』($t(228) = 3.40, p < .01$)であった。これらはともに中国人留学生の方が日本人学生よりも有意に高い結果になった。また、相互協調性を表す第1因子『他者評価の意識』と第4因子『他者への親和・順応』には有意差は見られなかった。

4.5 友人同士の贈答行動と文化的自己観の関連

研究課題1と研究課題2の結果を踏まえ、研究課題3では、日本人学生と中国人留学生において、友人同士の贈答行動と文化的自己観にどのような関連があるかを検討する。日本人学生、中国人留学生それぞれに対し、贈答行動の8因子を従属変数、文化的自己観の4因子と年齢を独立変数として、強制投入法で重回帰分析を行った。

4.5.1 日本人学生の友人同士の贈答行動と文化的自己観の関連

まず、日本人学生における友人同士の贈答行動と文化的自己観との関連についての分析結果を述べる。分析の結果は以下の通りである(表4)。

贈答行動の第2因子『相手の好みや反応重視の贈答』に対し、文化自己観の第3因子『自己意見の保持』($\beta = .218, p < .05$)と文化的自己観の第4因子『他者への親和・順応』($\beta = .328, p < .001$)が正の有意

表4 友人同士の贈答行動を従属変数、文化的自己観と属性を独立変数とした重回帰分析の結果(日本人学生)

独立変数	従属変数							
	F1抵抗のない貸借	F2相手の好みや反応重視の贈答	F3双方向性重視の贈答	F4無難な贈答	F5好意的感情からの奢り	F6規範意識からの奢り	F7割り勘	F8個人的空間での相手への気遣い
F1他者評価の意識	-0.013	0.129	-0.116	0.122	0.032	0.027	-0.048	-0.129
F2自己判断の確信	-0.071	-0.034	0.094	-0.019	0.120	0.122	-0.075	0.005
F3自己意見の保持	-0.155	0.218*	0.012	-0.088	-0.023	-0.015	-0.061	-0.004
F4他者への親和・順応	-0.044	0.328***	-0.102	0.248**	0.402***	-0.101	0.043	0.211*
F5年齢	-0.063	0.120	-0.059	0.229**	-0.027	-0.024	-0.032	0.022
R ² 決定係数	0.038	0.199***	0.049	0.144**	0.179***	0.025	0.014	0.044
*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$								

日本人学生と中国人留学生における友人同士の贈答行動と文化的自己観の関連

な影響を及ぼしていることが示された。このことから、相手の好みに合ったものを贈ることで、友人との関係を円滑に維持したいという考えが定着していると考えられる。

また、贈答行動の第4因子『無難な贈答』に対し、文化的自己観の第4因子『他者への親和・順応』（ $\beta = .248, p < .01$ ）が正の有意な影響を及ぼしていることが示された。このことから、日本人学生は、贈り物をするのでかえって相手に気を遣わせたくないという気遣いをすると推測される。加えて、『年齢』（ $\beta = .229, p < .01$ ）も正の有意な影響を及ぼしていることが示された。このことから、年齢が上になるほど相手への気遣いを意識する傾向にあることが窺える。さらに、贈答行動の第5因子『好意的感情からの奢り』に対し、文化的自己観の第4因子『他者への親和・順応』（ $\beta = .402, p < .001$ ）が正の有意な影響を及ぼしていることが示された。このことから、相手への好意的感情を率直に示すことで、今後も円満な関係を維持したいという考えが推測される。

4.5.2 中国人留学生の友人同士の贈答行動と文化的自己観の関連

次に、中国人留学生における友人同士の贈答行動と文化的自己観との関連についての分析結果を述べる。分析の結果は以下の通りである（表5）。

表5 友人同士の贈答行動を従属変数、文化的自己観と属性を独立変数とした重回帰分析の結果（中国人留学生）

独立変数	従属変数							
	F1抵抗のない貸借	F2相手の好みや反応重視の贈答	F3双方向性重視の贈答	F4無難な贈答	F5好意的感情からの奢り	F6規範意識からの奢り	F7割り勘	F8個人的空間での相手への気遣い
F1他者評価の意識	-0.024	0.140	-0.108	-0.073	0.013	0.044	0.211	0.040
F2自己判断の確信	0.062	-0.018	0.081	0.066	0.276*	-0.039	0.000	-0.026
F3自己意見の保持	0.150	-0.039	-0.065	0.047	0.223	0.006	0.165	-0.012
F4他者への親和・順応	0.179	0.357**	0.229*	0.052	0.081	0.259*	-0.035	-0.081
F5年齢	0.146	-0.044	0.195	0.181	-0.092	-0.018	0.053	-0.110
R ² 決定係数	0.093	0.160*	0.091	0.050	0.143*	0.074	0.055	0.021

*** $P < .001$ ** $P < .01$ * $P < .05$

贈答行動の第2因子『相手の好みや反応重視の贈答』に対し、文化的自己観の第4因子『他者への親和・順応』（ $\beta = .357, p < .01$ ）が正の有意な影響を及ぼしていることが示された。この概念は「他者との対立の回避や協調性を重視する」というものであるため、相手に喜んでもらいたいという考えが、相手の好みに合ったものを選ぶという贈答行為に表れていると考えられる。また、贈答行動の第5因子『好意的感情からの奢り』に対し、文化的自己観の第2因子『自己判断の確信』（ $\beta = .276, p < .05$ ）が正の有意な影響を及ぼしていることが示された。この概念は「他者の意見や状況に左右されず、自分の判断を貫く」という自己決定への自信を表すことから、相手の反応を恐れず、自分の好意的感情を率直に示すことに抵

抗が少ないことが考えられる。また、相手の好意をそのまま受け入れる気持ちがあるという認識が互いに定着していることも推測される。

5. 考察と今後の課題

本研究では日本人学生と中国人留学生における、出身国での同性の友人同士の贈答行動と文化的自己観の関連を明らかにした。この結果、日本人学生は、①『相手の好みや反応重視の贈答』に対し『自己意見の保持』と『他者への親和・順応』が正の有意な影響を及ぼしていること、②『無難な贈答』に対し『他者への親和・順応』と『年齢』が正の有意な影響を及ぼしていること、③『好意的感情からの奢り』に対し『他者への親和・順応』が正の有意な影響を及ぼしていることが示された。さらに、中国人留学生は、①『相手の好みや反応重視の贈答』に対し『他者への親和・順応』が正の有意な影響を及ぼしていること、②『好意的感情から奢り』に対し『自己判断の確信』が正の有意な影響を及ぼしていることが示された。これらの結果を、日本人学生と中国人留学生の共通点について述べ、次に、日本人学生に見られる特徴と中国人留学生に見られる特徴について述べる。

第一に、日本人学生と中国人留学生の共通点について述べる。共通点として、贈答行動の『相手の好みや反応重視の贈答』を規定する要因として、文化的自己観の『他者への親和・順応』が影響を及ぼしている点が挙げられる。このことから、日中ともに旅行のお土産や誕生日のプレゼントなどの贈答に、他者との関係構築を重視する文化的自己観の相互協調性が関わっていることが窺え、自分の一方的な判断よりも相手に喜んでもらいたい、友人との関係を円滑に維持したいという気持ちで選ぶことには違いがないと言えるだろう。

第二に、日本人学生に見られる特徴について述べる。日本人学生の場合は、『相手の好みや反応重視の贈答』に対し、『他者への親和・順応』の他に『自己意見の保持』も影響している。『自己意見の保持』とは常に自分の意見を持っていることを意味する。つまり、贈答行為に対し、「相手の好みに合わせなければならぬものだ」と強い意識を持っていることも考えられる。さらに、『他者への親和・順応』という文化的自己観は、『相手の好みや反応重視の贈答』の他に、『無難な贈答』や『好意的感情からの奢り』にも正の影響を及ぼしている。高田(1999)は、日本文化で相互協調性が積極的に追及される形で相互独立性が形成されるような過程を2次の反映過程としていることから、日本人学生にとって贈答行動には文化的自己観の相互協調性が大きく関わり、特に『相手の好みや反応重視の贈答』にはその価値観が強く影響していることが窺える。理想的な友人との付き合い方を尋ねた質問票の自由記述欄における日本人学生の回答には、「適度に距離を保ちながらも、本音を言い合える関係」、「仲良くなってもあまり迷惑をかけるようなことをせず、相手の状況を考えるようにする」、「依存し合わない程度に、お互いを思いやり意見を出し合ったりすることができる」、「気のおけない関係性が理想的だが、無意識に相手に配慮が払える相手ならなお良い」など一見相反した回答が多く見られたが、中国人留学生には見られなかった。このことから、日本人学生の方が中国人留学生より、相手の反応や状況を優先し、時には自分自身の率直な思いを自ら抑制するという他者を中心に考える意識が強いと考えられる。

第三に、中国人留学生に見られる特徴について述べる。『好意的感情からの奢り』を規定する要因として、中国人留学生は『自己判断の確信』が影響している。このことから、中国人留学生の贈答行動には文化的自己観の相互独立性が関わっていることが窺える。事前調査では、日本人学生は奢りに対し「理由があればするが、理由がなければ不安」などと答えているが、中国人留学生は自分が奢る場面に対し「嬉しい気

分を共有したいとき」などと答えていることから、自分の喜びや好意的な感情は相手も共感するはずだという前提のもと自分の好意的感情を、奢りという行為によって積極的に表現する傾向にあることが考えられる。また、友人の行動に対して違和感を持った場面について尋ねた質問票の自由記述欄において、中国人留学生は日本人学生に対し「日本人は直接自分の思っていることを表すのが好きじゃない」、「いつも自分の本音を隠す」、「例えば一年付き合っても、とても親しくなるはずだと思うが、家族のことはあまり話をしなくて、距離感はずっと感じる」などの回答が見られた。また、中国人同士でも「相手が本音ではない」と感じたときに違和感を持つという回答があった。このことから、中国人留学生は相手が自分に対して本音で向き合っているかを重視していることが窺え、思っていることを率直に表現することで互いを尊重し合い、友人関係を深めていることが推測される。そのため、中国人留学生は、日本人学生のように相手の感情を先回りして判断するようなことはせず、自分の意思に従って自分を中心に考え、行動する傾向が強いことが窺える。

以上のように、本研究での日本人学生と中国人留学生における贈答行動と文化的自己観の関連から考察を述べてきた。では、これらの研究結果は日本人学生と中国人留学生の相互理解のために、どのように役立てることができるだろうか。本研究において、日本人学生と中国人留学生はそれぞれ自文化のもとではどのような価値観が贈答行動に影響しているのかについて、日本人学生は他者を中心に、中国人留学生は自分を中心に考えて行動する傾向があるという示唆が得られた。この点では、日本人学生と中国人留学生の双方に異文化理解における情報を与えることができるであろう。加賀美 (2006) は教育的介入によって、多文化理解態度を構成する特徴的な態度要因にどのような効果が見られるかについて検証した結果、日本人学生と留学生の双方に意識の変化が見られ、同様に効果が生じていることが認められた。このことから、交流の場で双方を巻き込むような教育的介入を行い、客観的に自分や相手の持つ価値観を見つめ直すという視点からの疑問解消の機会を提供することが有効だと考えられる。日中における贈答行動について、自身の経験や概念的な知識のみでは、行動の違いに過度に着目し感情的な議論に陥る可能性がある。しかし、国民性に関するステレオタイプの助長に留意しつつ、自己と他者との関係構築志向の傾向という視点の提示により、自身の当事者意識と相対的な異文化理解を促すことができると考える。加賀美 (2012) は、ホスト社会の人々は自分たちのもっている価値観と異なる価値観をたやすく受容することは難しいと述べているように、特にホスト社会にいる日本人学生には、意図的に自分以外の価値観に柔軟に向き合う機会を与えることも必要かもしれない。その題材として、贈答行動は友人同士など対等な関係においても見られる相互的な対人行動であるため、日本人学生にとっても中国留学生にとっても自身の経験があり、当事者意識を得やすい。さらに、本研究では中国人留学生を対象にしているが、贈答行動は学生にも身近な社会的行動であるため、他国からの留学生も自身の問題として捉えやすい。このことから、異文化理解の一例として、贈答行動と文化的自己観の関連を検証した本研究の結果をもとに、自身や相手の価値観を捉え直す機会の提供ができるのではないだろうか。

今回の研究は出身国での友人同士の贈答行動及び文化的自己観について尋ねたものであるため、中国人留学生においては日本での滞在期間⁽⁴⁾による日本人の価値観や習慣の影響をそれほど受けるものではないと考えるが、今回の調査結果のみでは断言できない。また、性差⁽⁵⁾による贈答行動及び文化的自己観の差異についても今回の分析では十分な解釈が得られなかったため、今後、インタビューなど質的調査を行うことを課題としたい。加えて、中国人留学生の出身地による贈答行動に差異はあるかについても検証したい。

<注>

- (1) 尺度により測定された個人差には相互独立性・相互協調性という用語が用いられている。
- (2) 文化的自己観についての尺度は、高田他(1996)の「相互独立的一相互協調的自己観尺度(改訂版)」(全20項目)を用い、質問文は高田(2004)に依拠している。
- (3) 学部留学生と日本語学校生を対象にしているが、本稿では広く「中国人留学生」とする。また、価値観は態度や認識よりも状況が変化しても変わりにくいとされていることから、日本で生活する中国人を対象とした場合でも、出身国での場合とあまり変わらないのではないかと考えられる。今回の調査では出身国での場合について尋ねており、日本語学校生と日本人学生との接触の有無やその関連、日本で生活する上での行動様式の変化については、質問項目がないため今回の調査からは不明である。今後の課題としたい。
- (4) 相関分析の結果、滞在期間と贈答行動及び文化的自己観の各因子項目には有意差は見られなかった。ただし、今回の質問紙調査の対象者は滞在期間が5年未満の学生が大多数であるため、長期の滞在による影響に関しては今後、検討が必要である。
- (5) t 検定の結果、有意差が見られたのは贈答行動の第3因子『双方向性重視の贈答』($t(203)=2.77, p<.01$)と第5因子『好意的感情からの奢り』($t(230)=2.57, p<.05$)、文化的自己観の第2因子『自己判断の確信』($t(223)=2.37, p<.05$)であり、すべて男性の方が女性よりも有意に高い結果になった。

<参考文献>

- 花澤聖子(2008)「中国社会になぜ「割り勘」がなかったのか」『比較文化研究』84, 47-55
- 伊藤幹治(2011)『贈答の日本文化』筑摩書房
- 加賀美常美代(2001)「留学生と日本人のための異文化間交流の教育的介入の意義」『三重大学留学生センター紀要』3, 41-53
- 加賀美常美代(2006)「教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか シミュレーション・ゲームと協働的活動の場合」『異文化間教育』24, 76-91
- 加賀美常美代(2012)「グローバル社会における多様性と偏見」加賀美常美代・横田雅弘・坪井健・工藤和宏編著『多文化社会の偏見・差別一形成のメカニズムと低減のための教育』明石書店, 12-36
- 北山忍(1994)「文化的自己観と心理的プロセス」『社会心理学研究』10(3), 153-167
- 北山忍(1998)『自己と感情 文化心理学による問いかけ』共立出版
- Hwang, K.K. (1987). "Face and Favor: The Chinese Power Game" *American Journal of Sociology*, 92(4), 944-974
- Markus, H.R. & Kitayama, S. (1991). "Culture and the self: Implications for cognition, motivation, and emotion." *Psychological Review*, 98, 224-253
- 村山孚(1995)『中国人のものさし日本人のものさし』草思社
- 日本学生支援機構(2011)「平成23年度外国人留学生在籍状況調査結果」
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data12.html (最終閲覧日: 2013年9月10日)
- 岡田努(1999)「現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について」『教育心理学研究』47, 432-439
- 尚会鵬・徐晨陽(2008)『これでわかる中国人の常識・非常識—巨大な隣人とのつきあい方—』三和書籍
- 園田茂人(2001)『中国人の心理と行動』日本放送出版協会
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀(1996)「相互独立的一相互強調的自己観尺度(改訂版)の作成」『奈良大学紀要』24, 157-173
- 高田利武(1997)「中国における文化的自己観一日中の比較—」『総合研究所所報』5, 3-13
- 高田利武(1999)「日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程—比較文化的・横断的資料による実証的検討—」『教育心理学研究』47, 480-489

日本人学生と中国人留学生における友人同士の贈答行動と文化的自己観の関連

- 高田利武 (2002) 「社会的比較による文化的自己観の内面化—横断資料に基づく発達の検討—」『教育心理学研究』 50, 465-475
- 高田利武 (2004) 『「日本人らしさ」の発達社会心理学 自己・社会的比較・文化』 ナカニシヤ出版
- Triandis, H.C. (1995). *Individualism & collectivism*, Boulder: Westview Press. (トリアンディス, H.C. 神山貴弥・藤原武弘編訳 (2002) 『個人主義と集団主義—2つのレンズを通して読み解く文化—』 北大路書房)
- 王宇新 (2006) 「中国と日本の若者の贈答行動に関する一考察」『文明21』 16, 117-134
- 戦旭風 (2007) 「友人との付き合い方から見る中国人留学生と日本人学生の友人関係」『留学生教育』 12, 95-105